

月島のまちの
植木と招き猫。
なにげない景色にも、
スローな魅力が
にじみ出る。



スローがまちを元気にする



月島 東京
豊岡 兵庫
守山 滋賀
気仙沼 宮城

特集 / スローなまち暮らし

古きよき路地の風景が残る、大都市・東京の月島。コウノリとの共生を目指す豊岡。「ゆっくりとした成長」を掲げる守山。震災を乗り越え、日本初のスローシティに認定された気仙沼。4つの事例から、元気なまちにはスローな要素が重要であることが見えてきた。 撮影 / 名取 和久



Special Feature
Slow Living City

スローが
まちを
元気にする

01

Tsukishima, Tokyo

大都市のなかの、古きよきまち

月島

取材執筆／編集部 撮影／名取和久

もんじゃ焼きのまち、月島。古きよき路地の風景にも、人気が集まっている。長屋とマンションが共存するこのまちから、大都市におけるスローなまちの可能性が見えてきた。

東京都

もんじゃ焼きのまちとして知られる東京の月島。しかし、このまちの人気の理由は、もんじゃだけではない。東京駅や銀座がほど近いとは思えないほど、古きよき日本の雰囲気濃厚に漂う路地の風景が残っているのだ。

「古いものを生かす」という当たり前

しかし、そもそもなぜ、東京で月島にだけ古いまち並みが残っているのだろうか。

月島は、近代に入って計画的に区割り決められてつくられた、実は比較的新しいまちだ。明治25（1892）年、隅田川をさらった土砂を使って埋め立てられた月島には、区画整理された路地と長屋がつけられた。その後の戦災をまぬがれ、交通の便も近年まで比較的良好な月島は、その頃の古いまち並みを今に伝えている。長屋の残る路地が整然とした印象を受けるのは、

計画的につくられたまちの名残なのだ。

月島のとまりまち・豊洲の芝浦工業大学で教鞭をとる志村秀明教授は、月島生まれ、月島在住。途中月島を離れたこともあるというが、やはり月島が恋しくなり、20年前に戻ってきた。そ



右上／月島生まれ、月島在住の志村秀明教授。
右下／月島の住所表示
左／築90年の長屋を改装し、現代によみがえらせた志村教授の家。



というモデルになるものをつくりたかった」（志村教授）

現在、志村教授の長屋は、市民講座の会場や、シェアハウスとしても活用されている。

「路地、そして長屋は、いわば月島のコミュニティの基本単位です。そこでは面倒なこともありますが、まちとのつながりや居心地のよさは、路地から

生まれてくると思います」（志村教授）

高層マンションと長屋が共存するまち

現在の月島の風景は、とても不思議である。路地の向こうに、高層マンションが林立しているのが見えるのだ。「しかし」と志村教授は言う。

「必ずしもマンションと長屋が隔絶していないのが、月島のおもしろいところ。そもそも、現代の生活では、長屋に親子2世帯が暮らすというのは難しい。しかし、1世帯が長屋、1世帯が近所のマンションという住まい方ならできるわけです」

もちろん、これからマンションがさらに増え、路地が減っていくけば、月島の魅力はなくなってしまう。路地の長屋の建て替えが難しいことも事実だ。



「これからは、若い方々と協力して、ネットワークを広げていく必要があると思っています。路地を守っていくためにも、長屋を貸したい人と、長屋に住みたい人や長屋で商売したい人とをつなげる知恵が必要になってくる。そのためNPOをつくらうとしています」

と、志村教授は今後の展望を語った。古いものを生かす、古いものを再生するということは、今回取り上げた他のまちでも登場する、いわば「スローなまち」の必須項目。月島でもそれは変わらない。最後に志村教授は、月島に限らず、自分がまちづくりをする上で大切にしていることを語ってくれた。それは「きちんとまちに住む」ということだ。住居やまちは生活するための装置ではない。人それぞれのライフスタイルのなかで、まちとの関係をつくっていくことが大切なのだ。

月島では、路地を中心に人々が集い、憩い、交わっている。それによって、これまでも人々がまちとの関係をきちんとつくってきたし、これからもつくっていくはずだ。

上／路地は、生活の場であり、憩いの場でもある。
下／スローなまちには、やはりネコは欠かさない存在だ。





豊岡のシンボルコウノトリ。現在、ふたたび野生に帰すため、放鳥する取り組みが、活発に行われている。

上/コウノトリの郷
営農組合の暇悦喜さん。
中/コウノトリがふたたび舞う
まちにするため、
無農薬・減農薬で
育てられる稲が増えている。
下/無農薬・減農薬で
育てられたお米は
「コウノトリ育むお米」として
ブランド化されている。



コウノトリがすみやすいまちは、ひとも住みやすい

豊岡

兵庫県

取材執筆/野村麻里 撮影/喜多章

「コウノトリのまち」の 大胆な政策

大阪から特急で約3時間、兵庫県北部の豊岡市は、古いまち並みを残す出石、「関西の奥座敷」とも言われる城崎温泉といった観光地を擁するともに、「コウノトリのまち」として有名だ。

かつては、日本各地の田圃や里山に生息していたコウノトリ。しかし、生息環境の悪化から、日本のコウノトリは昭和46(1971)年に絶滅してしまっただけでなく、現在も絶滅危惧種に指定されている。今、豊岡を飛ぶコウノトリは、市が人工飼育で繁殖させ、放鳥したコウノトリの末裔なのだ。平成17(2005)年、5羽の放鳥から始まり、現在は83羽の野生化したコウノトリ

がいていう。今では、田圃や川の近くで、空を飛ぶコウノトリを見ることが出来る。豊岡は、一度失われたコウノトリという「伝統」を復活させ、これからも伝えていけるような、持続可能な取り組みをしているのだ。これも一種の「スロー」の形と言えるだろう。しかし農家は「農薬を使っていたらコウノトリは戻ってこない」と訴えていた。戦後の早い時期から保護活動が始まったにもかかわらずコウノトリが絶滅したのは、農薬が体内に蓄積した影響で卵がかえらなくなったことも原因だったのだ。

新たな米づくり 「コウノトリ育む農法」

そこで市は、農家やJAと協力して、無農薬、減農薬の米づくりに乗り出し

出石(いずし)、城崎といった観光地も擁する豊岡。城下町・出石には古いまち並みや劇場も残る。



ヒエやオモダカといった雑草だ。無農薬の米づくりは雑草との闘いと暇悦喜さんは言う。稲が倒れてしまうため、田圃で大型の除草機は使えないのだ。

豊岡市の農家はほとんどが兼業で、現在246戸。無農薬栽培は農家の負担が大きい。それでも「うちの田圃にコウノトリがきたよ」という声が届き、コウノトリ育む農法に関心を持つ農家は増えているという。

失われたものを 大切に スローなまちの取り組み

こうした試みは持続可能で普及性が

ないと意味がない。市では、無農薬だけにこだわらず、農家の負担が少ない減農薬も提唱している。また、未消毒の苗の確保や一定の価格での買い取りといったJAの協力も大きい。「コウノトリとの共生とは、コウノトリだけではなく、ひとも生きやすい環境を取り戻すという試みです。豊岡では、コウノトリがいなくなったことで『何か失われた』と市が明確に考えている。そこがこの問題に取り組みとくに重要なことでした」と豊岡市コウノトリ共生部の瀬崎晃久さんは言う。

や手間がかかることも事実である。だが、豊岡の試みのように、一度失ったものでも再生できるという事例は、私たちに大きな勇気を与えてくれる。コウノトリは今、豊岡の空を悠々と舞っている。豊岡の取り組みのように、失ってしまったという事実と正面から向き合うことで、失ったものを取り戻せるのではないかと。そのためには、効率一辺倒の考えから一歩離れ、長い目でものを捉えていく必要がある。失ったものの大きさ、大切さを考えれば、人間がなんでもできるという考えを捨て、伝統や自然に対して謙虚になる。それが最善の道であると気づくことができるのではないだろうか。

「コウノトリのまち」として知られる兵庫県豊岡市。しかし、約40年前、コウノトリは絶滅してしまった。一度絶滅したコウノトリを復活させる大胆な試みのなかで、豊岡市が見つけたものとは。

スローが
まちを
元気にする

03

Moriyama, Shiga

ゆつくりと、ひとが増えつづけるまち

守山

滋賀県

大阪・京都の
ベッドタウンとして
成長を続ける滋賀県守山市。
やみくもな成長を抑え、
魅力的なまちづくりを目指す。

取材執筆／野村麻里 撮影／喜多章

平成22（2010）年、東洋経済新報社の「住みよさランキング」で全国第10位、近畿で1位となった滋賀県守山市。京都から電車で25分、大阪から55分と交通の便がよい。若いファミリー層の流入が多く、毎年、約800人ずつ人口が増加している。

市内には、野洲川の伏流水の流れる細い水路が張り巡らされている。野洲川と水路、そして琵琶湖と、守山は水と縁が深い。

豊かな水が育む農業

豊かな水を利用した農業も昔から盛んで、兼業も含め、現在も世帯数の1割弱が農家だ。市街地でJAおうみ富士が運営する「おうみんち」は、生産者と消費者、両方にはたらきかけようとする新しいスタイルの直売所兼レストランとして人気を集めている。商品の値段は生産者が決め、毎朝、直接持

周辺の土地よりも河床が高い、天井川でした。昭和45（1970）年から着手した大改修で河床が下がり、氾濫の心配はなくなりましたが、今度は水が湧かなくなってしまうのです」と、市長の宮本和宏さんは説明してくれた。しかし、今も水が守山の要であり、魅力となつていくには変わりがありません。そして、守山に住みやすいといわれる理由のひとつは「自治会（町内会）を中心とした人と人との絆の強さ」ではないかと宮本さんは言う。

ち込まれる。そして閉店時に残った品を回収する。消費者の動向が直接わかり、生産者にとっては楽しみにもなっているという。スローなまちづくりに欠かせない、地域内での商いが大切にされているのだ。地元野菜で作る料理の味を知ってほしいと、売っている野菜を使ったレストランもある。

JAおうみ富士の川端均さんは、お客さんを「畑に近いから収穫に行きませんか？」と誘うことがある。自分で収穫すれば、多少形が歪んでいても誰も気にしない。けれど袋詰めされた野菜を選ぶとなると、あれこれ文句が出る。この間をつなげるのが「おうみんち」の役割だと川端さんは言う。

ゆつくりとした成長で、市民に誇りを

現在、守山の水路の水は、野洲川の

「自治会が行う火祭り、すし切り祭りといった伝統行事がしっかり継承されていて、自治会の加入率が95%ととても高い。だから外から入ってきた人もすぐに馴染むことができるんです」

また、「都市が無秩序に拡大する『スプロール』は認めない」という宮本さんの言葉通り、平成21（2009）年に制定された地区計画制度では、周辺の自治会と話し合いながら進められる場合に限り、新たな住宅地を開発できると決められた。宮本市長が目指す守

上流からの農業用水と、その他はすべて伏流水がポンプでくみ上げられているもので、自然に湧いているものはない。しかし、かつては多くの湧水があり、またどこを掘っても水が湧いた。「10年に一度は氾濫していた野洲川は、

山市とは。「どこを掘っても弥生時代の遺跡が出てくる」という歴史の古さや、恵まれた自然を、市民が誇れるまちにしたい。スピードは遅くていいから、少しずつひとが増えつづけるまちをつくりたい」と語る。ゆつくりと、少しずつ、けれど秩序ある成長をしていくまち。これこそ、スローなまちの形といえるのではないだろうか。



宇野宗佑元首相の生家であった造り酒屋は、改装され、市民ギャラリーやレストランとして活用されている。



初夏にはゲンジボタルが舞う、守山の清流。

守山では、豊かな土地と水を生かし、農業も盛んだ。左／びわこわさび 右／伝統やさい、笠原しようが

スローが
まちを
元気にする

04

Kesennuma, Miyagi

震災を乗り越え、日本初の公認スローシティとなった

気仙沼

気仙沼市は、2013年4月に日本で初めてイタリアのスローシティ連合から認定を受けた唯一の「スローシティ」である。気仙沼はいかにして公認スローシティとなり得たのか。市民と行政が共に連携して認定に至った、その軌跡を追った。

取材執筆撮影／野村麻里

宮城県

震災後に再開した気仙沼港。漁獲量日本一を誇るカツオをはじめ豊かな海の恵みがまちにふたたび活気を与える。



海と森と川が育む豊かな恵み

気仙沼のスローシティ運動の中心的な役割を担うのは、地元のおおきく「男山本店」代表取締役の菅原昭彦さんだ。2001年頃から、「食」を核にしたまちづくりを進める団体「スローフード気仙沼」を理事長として率い、活動してきた。

暖流の黒潮と寒流の親潮が交差する三陸沖とリアス式海岸のおかげで、豊かな海に囲まれる気仙沼。海藻類も多く生息し、ここで育まれる牡蠣や海藻の養殖は、餌を与えずに育てられるので海を汚さない。陸地はすぐに山間部へと続き、森、川、海がそれぞれに影響しあい、人びとの暮らしを支えてき



す、地域を良くして自分たちも楽しく暮らそうという考え方にとても合っていました」

「フード」から「シティ」へ

イタリアのスローフード協会に働きかけながら同時に地元行政の賛同を得て、2003年、気仙沼市は「スローフード都市」を宣言する。続いてスローシティ連合の活動を知った菅原さんが認証について問い合わせたところ、再生可能エネルギーへの取り組みや、電磁波のモニタリングシステムの整備など、日本の小さな町では整備しにくい条件が並んでいた。また条項のひとつに人口5万以下、とあったが、気仙沼の人口は当時、6万5000人。認定は難しいように思われた。「あきらめたわけではありませんが、正直言って、クリアできる条件ではないと思います、進められずにいました」

そして2011年3月、東日本大震災が起きる。気仙沼でも1300人を超す死者・行方不明者が出る大惨事となった。海岸近くは津波にのまれ、地盤が沈下し、現在も土地の嵩上げを含む復旧作業が続けられている。

震災後、スローフード協会から「もう一度、チッタ・スロー（スローシティ連合）の認定について



北海道に向け出港するサンマ漁の船を家族が見送る「出船おくり」は、気仙沼の伝統行事。打ちばやしでにぎやかに送り出す。会場で挨拶する気仙沼市長、菅原茂さん。



震災後、スローフード協会から「もう一度、チッタ・スロー（スローシティ連合）の認定について

考えてみないか」という打診が来た。この申し出には、震災復興の支援をしたいというイタリア側の意向もあり、条項について足りないところは、今後整えていく姿勢があるとみなされ、2013年4月の認定につながった。

認定を受け、菅原さんは「友人が増えたという感じです」と顔をほころばせる。「世界中のまちとネットワークができたことは、日本の一地方都市にとって、とても意義がある。ヨーロッパで起きている問題やその解決策を知ること、自分たちが問題を抱えたときの参考になる。また、この中で気仙沼が発信できるというのも大きなメリットだと思います」

これから日本で認定を受けようとする都市が増えたとき、気仙沼に学ぶことは多いだろう。菅原さんが「日本人は何でも、ねばならない」と、突き詰め、尖鋭化して考えがちですが、イタリアのスローフード運動やスローシティ運動には、寛容と推奨はあっても、禁止や排斥がないんです」と話す通り、その判断基準は意外に大らかで、交渉の余地があったという。今後、菅原さんは、先達として国内のネットワークづくりにも積極的に携わっていきたいと考えている。

悠久のリズムの中で生きるまち

気仙沼のスロー運動はまた、市民と行政とが連携し、共にまちづくりを進

めているのも大きな特徴だ。震災後の復興計画の中にも「スローでスマートなまちづくり」がうたわれる。現市長の菅原茂さんは「スローフードにしる、スローシティにしる、根底に流れているのは土地のリズム」だと私は思っています。気仙沼の人びとは、昔から海の恵み、山の恵みをいただいで生きてきて、今も根本は変わっていない。そういう長い、自然をベースにした悠久のリズムの中で生きることが、ここに暮らす心地よさだと思っております」と語ってくれた。

2004年にスローシティの視察で訪れたイタリア・オルヴィエトで。市長(写真中央)の左隣が菅原昭彦さん。



写真提供=スローフード気仙沼